

ラウンジの冒険—互惠的学習環境の創出— Aventure de « lounge » - conceptualisation et installation de l'environnement pour l'apprentissage réciproque

倉舘 健一、五十嵐 玲美、
吉田 友子、ルイス・クライド、三橋 紫
KURADATE Kenichi, IGARASHI Remi,
YOSHIDA Tomoko, LEWIS Clyde, MITSUHASHI Yukari
Université Keio
remi_igarashi?flang.keio.ac.jp, tomokoyininogashira?sunny.ocn.ne.jp,
clydelew?gmail.com, ymit?cc.tuat.ac.jp, kr?a8.keio.jp

L'université Keio a fondé et gère depuis 2007 le « Plurilingual Lounge » dans le cadre de « Action Oriented Language Learning (AOP) Project » mené par Keio Research Center for Foreign Language Education. Ce lounge a pour but d'encourager les étudiants dans leur apprentissage autonome et dans leur pratique des activités interculturelles.

Nous rapportons dans un premier temps sa mise en place en évoquant nos tentatives pour développer une compétence interculturelle, puis les problèmes surgis au cours de son application au plurilinguisme et au pluriculturalisme. Enfin, nous vous présenterons les résultats des interviews d'évaluation, afin de réaliser la perspective de l'apprentissage réciproque dans un environnement plurilingue-pluriculturel. *(Cette recherche est soutenue par le ministère de l'Éducation et des Sciences dans le cadre de « Academic Frontier »)*

はじめに

慶應義塾大学日吉キャンパスでは、2007年度より外国語教育研究センター内に「外国語ラウンジ」を開設し、運営している。これは学習における自律性を涵養するとともに、異文化トレーニングなどの活動を実践する場として取り組まれているものである。2008年度からは留学生をシフト制のもとに配置し、活動の多言語化を図った。また2009年度からは新校舎の竣工を待って新設されるスペースへと場を移し、これまでのコンセプト化の試みから活動を拡大し、互惠的な複言語・複文化学習環境を創出することを構想している。

この稿ではまず構想化から開設に至るまでの流れを概観したのち、現在取り組まれている「多言語化」の過程で生じた問題点や対応策などについてまとめ、その上で、これらのラウンジでの活動全体に対する評価活動として本年度実施した、フォーカスグループによる調査の分析結果について報告する。

1. 外国語ラウンジの立ち上げの経緯・コンセプト化

まず環境整備の経緯の説明が必要であろう。外国語教育研究センターは日吉キャンパスの教室棟の一つである第三校舎にその本部を置いている。この第三校舎の中でもセンターの管理下にある二階のスペースのうち、特に設備の老朽化の進んだ自習室、教材準備室、また事務室奥のデッドスペースについて、次世代的な学習環境構築の観点からコンセプト化を行い、再整備につなげる計画を立案したのが契機となっている。これはあくまで極めて限られた空間に対するプランであるが、このスペースを実験的に運用することで、全学的に広がる学習環境改善に寄与するものとなることを企図した。外国語教育において考えられる適切な教材制作環境の吟味を行い、また自律学習スペースなどで展開されるであろう様々な活動を総合的な見地から分析し、適切な場所に配置し、改装を行なった。これに先立ち、学習環境整備に関連した国内外の視察調査を年間で6件実施し、また併せて学内における現状の学習環境の実態把握調査を行った。一般に国内で盛んとなっているCEFRの議論では、とりわけ到達指標のみが取りざたされることが多いが、この指標の一つとってみても、このような教育基盤としての学習環境整備の進展を抜きに語ることは難しい。しかしながら刊行される公的文書等の資料からでは情報の入手は困難であり、まして空間設計や教具などの工夫やその使い方と言った種々の事象は、遠く離れた土地からは想像だけに難しい。視察の意味が高かった大きな理由の一つである。

外国語スペース（FLS : Foreign Languages Space）と仮に名付けた旧自習室スペースのコンセプトは、ヨーロッパ共通参照枠の学習者中心主義の精神をベースとし、以下のようなものを掲げた。

<コンセプト>

1. **multi-purpose 多目的**：外国語教育の可能性を広げる様々な目的に対応
2. **flexible 柔軟**：汎用性のあるコンセプト。応用可能性
3. **open 非閉鎖的**：これまで想定してこなかった様々な対象者に利用を解放
4. **dynamic 動的**：絶えず発展していくことが可能
5. **user-friendly ユーザに優しい**：使う側がすぐにも理解可能で使用可能な形でサービスを提供
6. **non-dogmatic 非教条的**：こうなくてはならない、といったしがらみから解放された空間

<利用対象者のイメージ>

1. 学部生
2. 留学生
3. 一貫教育校の生徒
4. チューター、コーチによる学習者グループ

<利用形態、目的>

1. 中規模テレビ会議
2. 個人テレビ会議
3. DVD視聴(個人、グループ)
4. オンライン教材学習
5. リファレンス利用
6. 雑誌・新聞閲覧
7. 資格試験教材
8. チューター・コーチの導入

2. 「外国語ラウンジ」の開設と e-Lounge の展開

2007年4月、上記の6つのコンセプトに基づき、「外国語学習の可能性を広げる新たな空間」、また「外国語との出会いの場」として、「外国語ラウンジ」は開設された。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2009



外国語ラウンジは、学部生・大学院生をはじめ、通信教育課程の学生や外国語学校、一貫教育校の生徒にも開放して、自習や授業の予習復習に取り組むだけでなく、学部や学年を超えた仲間との協調学習の空間としても利用できるようにした。

ラウンジでは、自習室としての機能に加え、2007年5月より英語のネイティブ教員がチューターとして常駐し、「e-Lounge」と称して訪れた学生を対象とした異文化間コミュニケーショントレーニングや、外国語学習のメンタリング等を行った。また、大型液晶テレビ、DVD/ビデオデッキ、PCなどを設置し、インターネットやオンライン学習教材を活用した学習を行うことも可能にした。さらに、ラウンジを会場として、学生を対象に様々なイベントを企画・実施し、異文化体験の機会を提供した。学生の反響が大きな後押しとなったが、担当教員の帰国（2008年7月）に伴う補充が実現しなかったことが悔やまれる。

3. ICS 構想

日本においても多文化社会化、国際化が急速に進展し、外国語を取り巻く教育のパラダイムが受容型からコミュニケーション重視型へと大きくシフトしてきている。当然、外国語による高度なコミュニケーション運用能力の獲得は必要不可欠なものとなる。その獲得のために最も効果的な手段の一つとして、不足している学習言語の運用を促すための機会と場の提供が挙げられる。またそれと同時に、この高度なコミュニケーション能力の基礎を形成する自律的学習態度の涵養には、社会構成主義的観点からの「学び」の再デザインと、それにとまなう学習環境の包括的な最適化が求められる。特に、第二言語習得のプロセスにおいては、文法構造の明示的知識のみならず、このような言語運用の場や機会を活用することで獲得される暗示的知識がとりわけ重要と考えられる。

また本学では、国際センターを中心として、さまざまな国々の教育機関を対象とした留学プログラムの整備が進められており、今や留学は学生にとって特別な経験ではなくなりつつある。帰国生の入学者も増加を続けており、留学生の受け入れについても実数のみならず、国籍についてもさらに広がりを見せることが予想される。学内の学習環境整備に際しても、このような状況の変化を見据え、ホリスティックな観点から積極的に学生に働きかけるべく外国語教育をデザインすることが求められている。

また改めて学内を見渡すと、一方で一部署でのキャンパスを超えた取り組みの企画・運用の難しさがあり、理想的な学習環境の全学的構築が遅々として進まない状況がある。他方、学内には、教育の国際化に向けて活用可能なさまざまな人的リソースが潜在的に存在する。そこでこの人的リソースを活かした、新たな「学び」の場

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2009

を創出し、グローバル化時代に相応しい教育の活動拠点として提案を行ったのが、この「国際交流スペース (ICS)」である。

具体的には学内の人的資源、すなわち外国語教員志望の学生や留学生、帰国生などを積極的に活用し、また地域の外国人学校などと連携するなどして、国際センターと外国語教育研究センターがバックアップするボランティアな「学習支援スタッフ」を組織し、国際交流スペースという互恵的な学習環境体制を実現することを計画している。2009年4月にはこの提案は具体化し、「日吉コミュニケーションラウンジ (HCL)」として開所式典が敢行されたばかりである。

(<http://www.keio.ac.jp/ja/news/2009/kr7a4300000v4ad.html>)

4. 外国語ラウンジの複言語化とその実際

さて、この HCL での活動開始を控えて、2008 年度からはそれまで英語のみで運営されていた外国語ラウンジの活動の複言語化に取り組んだ。「複言語・複文化」学習環境を創出するため、世界各国からの留学生や帰国生を **Plurilingual Partner** (略して「プルリンパートナー」) として採用し、英語だけでなくその他の外国語や、さらにはこれら言語の背景にある文化について情報交換できる場所へと進化させた。1 時限ごとに 1~2 名の異なる言語文化背景を持つプルリンパートナーを配置し (図 1)、英語でそれぞれの国の文化や考え方について話し合ったり、様々なことばに触れたりなど、複言語・複文化環境が徐々に実現されるようになっていった。

2008 年 7 月には、これまでの活動のフィードバックのため、**Focus Group Interview** の手法で学生とプルリンパートナーにインタビューをした。以下が概要である。

参加者	慶應義塾の学生 17 名、プルリンパートナー 7 名、計 24 名
グループ構成	学生グループ×3、プルリンパートナーグループ×2
司会者	黒河 (研究分担者)、ルイス
記録	Interview はすべて録画。黒河がテープ起こしを担当
分析方法	Atlas Ti による解析 (吉田、黒河)

Focus Group Interview から得られた結果として、利用学生は概ね満足しており、特に帰国生の中にはキャンパス内の唯一の自分の居場所だと感じている者もいた。しかしながら、学生間 (一般学生と帰国生) の劣等感や疎外感、言語運用が高レベルでないと参加できないという誤解、常駐コーディネーター離職による不安定感、広報の不足や周囲 (教員や他学生) の関心の薄さなどへの不満も見られた。

以上の利用者の声を踏まえて、2008 年度後期からさまざまな改良を試みた。まず言語運用能力の差を気にせず参加できるような、基礎レベル学習者向けの言語・文化ワークショップ (**BASIC**) を、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語各 1 回開催した。トピックを挙げ (例: フランスワイン)、文化レクチャーを交えながら言語を用いて会話練習 (例: カフェで注文する) するという構成である (図 2)。学習者が普段使うことのないことばを練習する機会を創出されたが、さらに学習したことのない言語でもトピックへの興味から参加し、学習する言語との相違点を発見するなど、異文化接触によってもたらされる効果を実証することができた。また、外国語ラウンジでの具体的な利用イメージを記したフライヤーをキャンパス全語学教員に配布し、教員から学生に紹介してもらった。次第に外国語ラウ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2009

ランジの存在自体も広く学生の知るところとなり、利用学生の増加がみられた。

しかしながら、外国語ランジのこれまでの活動で、学生の参加は促すことができたかもしれないが、彼らの大半は「サービスを受ける」だけの受け身の態度であることは否めない。そこで2009年3月にはBASIC「日本語」を開催し、日本人学生からプルリンパートナーへ日本語や日本文化を伝えるワークショップを開催した。このように、日本人学生も留学生も、皆が互恵的に学びあえる学習環境を整備していくことが当面の課題となっている。

望ましい異文化コミュニケーションとは、自分と相手の共生共栄と相互尊重のために行う情報交換、情報共有、共通の意味形成行為であると考えられる(八代ほか、1998)。またある国のある特定の人とだけの交流となると、良い意味でも悪い意味でも、その人のイメージがその国の国民全体のイメージとなりかねない(ステレオタイプ形成)。個人レベルの交流をなるべく多く持つことが、ある集団や国のようなカテゴリーを均一化せず多様性を理解するのに役立つ。その疑似体験の場としてこの外国語ランジは最適であると同時に、外国語のみでなく全般的なコミュニケーション能力を高め、異文化間交流だけでなくひととひととの交流やそこから得られる発見を通して、自分自身をより深く知り、自己の言語能力、コミュニケーション能力、社会適応能力、ひいては自己の文化への洞察を深めることにもつながるのではないだろうか。

外国語ランジ プルリンパートナーシフト表
12/15 ~ 12/19

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
10:45~12:15	King 中国語 英語	BASIC (非構造化/非体系的な 学習者中心/異文化 コミュニケーション) 英語/中国語 専任社員/専任!	Red 中国語 英語 韓国語 フランス語	Blue 英語 中国語 韓国語	Black フランス語
Lunch Time					
13:00~14:30	Green 英語	Red 英語	Red 英語 中国語/韓国語	Red 英語 中国語/韓国語	Red 中国語 英語 韓国語/ドイツ語 韓国語/ベトナム語 英語
14:45~16:15	Blue 中国語 英語 ドイツ語 英語	Green 英語 Marie スペイン語 英語 フランス語	Green 英語	Blue 中国語 英語 フランス語	Red 中国語 英語 韓国語/ドイツ語
16:30~18:00	Black 英語 Marie 中国語/韓国語 英語 フランス語	Red 英語 Marie 中国語/韓国語 英語 フランス語	Green 英語 Marie 中国語/韓国語 英語 フランス語	Blue 中国語 英語 フランス語	Black 中国語 英語 Marie 中国語/韓国語 英語 フランス語

外国語教育研究センターウェブサイトでも毎週更新 → <http://www.flang.keio.ac.jp/>
または「プルリンパートナー」で検索!



【図1：プルリンパートナーシフト表の例】 【図2：フランス語 BASICの様子】

5.まとめ

2009年度4月に予定された新校舎内の「日吉コミュニケーションランジ」への移行は、外国語ランジのこれまでの活動を整理するよい契機となった。上記のようなワークショップを定期的に行うための基盤作りのほか、従来型の運営者から学生への一方通行の活動展開から、協働的・互恵的学習環境の創出が実現するよう、学習コミュニティの形成を支援するためのSNSの補完的運用などを含め、さまざまな工夫がなされた。今後もアクションを継続していきたいと考えている。

またこのような展開の一方、教職員や学生の間には、主に東アジアからの留学生が英語などの学習のメンターとして活動に参加することに対する懸念がないわけではないことを指摘しておきたい。対応としては、さまざまな言語・文化的背景を持つ学内の人材を巻き込み、多様性を備えた「学び」の共同体を形成しつつ、いわ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2009

ゆる母語話者モデルに依拠した言語教育・学習観を变化に導くとともに、多文化共生への感性を涵養するための活動をより広く展開していくことが考えられよう。

(なお、本研究は、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア事業「行動中心複言語学習プロジェクト」の成果の一部である。)

【参考文献】

- ・八代京子、町恵理子、小池浩子、磯貝友子 (1998)、「異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる」(三修社)。
- ・Lewis, C.H., Yoshida, T., & Kuradate, K. (2008). Report on the E-Lounge. *Summary of Research Activities 2007*. Keio Research Center for Foreign Language Education.
- ・Kurokawa, I., Yoshida, T., Lewis, C.H., Igarashi, R. & Kuradate, K. (Manuscript submitted to TESOL Quarterly). The Plurilingual Lounge: Creating New Worldviews Through Social Interaction. (刊行予定)